

記憶に残る私の仕事,そしてあの街

「ムーブル・ド・パリ」出展とパリの街角



岡 正樹

1) 「ムーブル・ド・パリ」出展

2005年、2006年の2年間、パリで1月に開催される「ムーブル・ド・パリ」という展示会に出展コーディネーターとして参加した。「ムーブル・ド・パリ」のメインは家具の展示会だが、インテリア全般のデザインプロダクトも展示することができる。前年度の秋にJIPA（一般社団法人日本インテリアプランナー協会）の主催する“インテリアのプロと企業をつなぐ展示会”である「IPEC」に展示された、デザイナーズ・ショーケースというデザイナーの優秀作品が「ムーブル・ド・パリ」の主催者から招待されることになり、極寒のパリの正月に二年続けて行くことになった。招待といっても、展示物の運搬、搬入、会場での設営は自分たちでやらなければいけないので、日本での出展作業とは比べることのできないほど段取りが難しかったが、今思えば変化もあり楽しくもあった。



「展示会場」
「交流パーティー」
「出展者の方々」



「凱旋門」
「ルーヴル美術館」
「パリの街角」

2) パリの街角

2年間で合わせて20日間パリにいと、自由時間も結構あったので、美術館、建築など見たいと思っていた場所にはほとんど行くことができた。しかし、ルーヴル美術館は合わせて4回も行ったが、それでも全体の10%程度しか見ていない。日本の美術館では考えられない規模と内容である。また、モンマルトルで季節の生ガキを食べたり、ワインを心行くまで飲むこともでき、国内での仕事では味わえない経験もすることができた。パリで驚かされるのは、150年前の凱旋門や100年前のエッフェル塔はもちろんのこと、ポンピドゥーセンターの外装もルーヴルのガラスのピラミッドも今や違和感なくパリの街角に溶け込んでいることだ。その後、プライベートでパリに行き、改装なったオランジュリー美術館や新しく出来たジャン・ヌーヴェル設計のケ・ブランリ美術館を見てきたが、パリはそのたびに少しずつ変わり、次第にそれが街角に溶け込んでいく不思議な街である。